

ジョージア (グルジア) 便り その53

演技派バレエダンサーを目指す?

文 高野陽年 text by Yonen Takano

ロシアバレエのトレーニンングを受けたダンサーは何かの役を踊るといふ時、踊るといふ単語である『タンツエヴァーチ』の代わりに、演じるという意味の『イグラーチ』を好んで使う。さらにはバレエダンサーと呼ばれるよりもバレエ・アーティストやバレエ・アクトリス、アクターという名称を名乗るのが一般的だ。

ダンスは古代より神との交信や自らの魂を具現化するために世界各地で行われてきた習慣である。バレエ(特にロシア系)はそこに同じ神事でも古代ギリシア的演劇という要素を加えることで神聖さや西洋文化の旗手としての役割を重視したのである。

しかしバレエは映画俳優と異なつて撮り直しはないし、観客の席もオーケストラを挟むので距離は遠い。舞台俳優と違い自らの思いを雄弁に語るセリフもない。僕らの使命は自らの体と踊りを通してストーリーや心情を観客に伝えるのだ。表情以外に僕らが意識すべきものは多い。ハツラツとした感じや高揚感はメリハリと大技で表現した

り、逆に悲壮感を目線やあごの角度、流れる動きで表す。

全幕ものバレエと言われるような、大きな作品の中では自分の踊るパート以外にもやるべきことは多い。ミザンセーヌと言われるような花を一つ置く動作や、どうやって椅子に座るか、剣の受け取り方まで観客の目線の位置を計算しつつ、役柄の性格を考え一つ一つにこだわりを持ってストーリーリーテラーとしての役割を果たそうとするのだ。

しかしガラコンサートで踊る抜粋作品や小品では必然的に観客が求めるものは違ってくる。10分の間に演劇性を訴えかけるのは難しいし、無意味にも思える。観客が理解する前に作品が終わってしまうからだ。そういう時はもつと演技を単純明解にして、ダンサーの持つ華を第一に考える。色気であったり、爽快感であったりもつとわかりやすく感じ取れるもので勝負するのだ。そして「珍しきが花」と言われるように目を見張るような大技などで観客を裏切ることを心がける。要するに同じ

作品を踊るにしてもコンサート形式なのか全幕の中で演じるのかによつて稽古の内容も変わってくる。

身体的神秘性と演劇性を組み合わせること観客をトランス状態へと導くのがバレエダンサーの役割であると僕は考える。できるならば全幕バレエのなかで僕の踊りを見てほしい。しかしいかなる状況でも観客をあとと思わせるのがバレエ・アーティストの真髄である。

バレエ・アクターだと胸を張って言えるような華のあるダンサーを目指すしかないとポルトガルでのガラコンサートへ向かう道中と思うのだった。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアートの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアート作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

